

節分草

池松 孝子

先日、友人から岡山県高梁市に自生する節分草の写真が送られてきた。彼女は特にご主人が山野草に詳しく、二人でその花の季節に合わせてあちらこちら出かけ、写真におさめるのを趣味としている。

節分草はその名のとおり節分の日に合わせるように咲く。落葉樹の林の外れ当たり、比較的日差しのある所に自生している。今年の冬は寒かったから節分に間に合うかなと心配すると、やはり開花時期が遅れるという。また、寒い地方では節分を過ぎて三月中旬になって咲くことも多いらしい。

偶然にも、その数日前にテレビのニュースで節分草のことが報じられているを見た。それは関東地方だった。石灰岩地の少し傾斜した所に見事に優しく咲いていた。しかし、ここ数年各地でその数が急激に減っているとあった。透き通る妖精のような愛らしい白い花びらを持つ花が、環境省レッドリストで準絶滅危惧種に指定されているというのだ。鹿などの野生動物による食害もあろうことは容易に想像できる。また乱獲や自生地の環境破壊もあるだろう。日本固有種であればなおさらである。

それを先の友人に話すととても信じられないという。ならばと調べてみると埼玉県小鹿野町、広島県庄内町、兵庫県丹波、京都市にも自生していることが分かった。絶滅寸前といわれていたが、花の観賞を楽しめるほどには姿を現わしていて、丹波では二月に節分草祭りのイベントも開かれているという。その花言葉は微笑み、光輝、気品とある。まさに可憐ということばがぴったりで、花の人気は高い。

友人はこうした山野で数個のこぼれ種を持ち帰り、自宅で鉢に植えたそうだ。ところが二年たっても発芽しない。三年目にやっと小さな芽が出てきた。さぞ待ちどおしかったことだろう。蕾の時はごく小さくて、花を咲かせながらもぐんぐん、といったも数センチだが伸び続けるという。そして夏になると地上部はすっかり枯れてしまう。